

「お、お願い、見ないで!!!」

「ほら!!
あいつの前でハデにイけよ!!」

(あ、頭の中かき回されて、
おかしくなるうう!!)

「むぐぐ〜!!!」

BAD END

「なあ遠坂、戦いも終わったしそろそろ僕の女になれよ」

「うるさい！誰があんた何かの！」



「そうは言うけどさー、お前のサーヴァントももういないし、衛宮は今どこにいるかもわからない……」

「もうどうしようもないだろ？」

「ここで僕の物になれば聖杯の力を分けてやってもいいんだよ？」



「黙りなさい慎二！私は聖杯の力なんでもものには興味がないわ！
それに衛宮君がきつと・・・」

「やれやれ、本当に強情だな遠坂は・・・
そういう気が強いところが良くもあるんだけどさ(笑)」

フ



「でもあんまり我儘いうのは良くないぜ？
今の僕にはお前の魔術なんか通用しないわけだし」

「そして……」

キョウ

ん

「？」

ガタツ！！

「あやー？」



「こーんな風に簡単に押し倒せるんだよ」

「あ、あんた、本当にどうしようもないクズね……」

「何とでも言えればいいさ、そんな口が利けるのも今のうちだからねえ(笑)」

はは

アハ

アハ

「すぐに僕のでアへるようにしてあげるからさー！」

「…ちよ、そんなもの近づけるんじゃないわよ…!!」

「フヒヒー！やだね、前からこうしてやりたかったんだ
それに、ここまで来たら発散させないと収まらないのさ」



「いぎいぎ、痛いー!」

「あれ?遠坂処女だったのか?
衛宮衛宮うるさいからとつくにあいつとヤってると思ってたよ!」

「ぶぐう、や、やめなさい慎二!」

みぢ

が

び

ん



「あー、遠坂の中ってこんななんだな、結構な名器だと思うよ
桜にちよつと似たところあるのは姉妹だからかな？」

「んぎ、さ、桜ってあんたまさか！」

「ああ、犯したよ？
あいつはもともと間桐の血を繋げるための苗床だからね」



ズンズン

おちゅ♡

ガッ

ガッ

ズン

「ふー、ふー、ふー」

「ひぐう、ふーふー」
(な、中、一杯だされて……)

「ふー、久しぶりだよこんな一杯出したのは！」



びゅるる

お

ぐい

お

ド

ぐ

〜

「はー、出した出した、いやあ気持ちよかったよ遠坂！
じゃあ仕上げとしてお掃除フェラとかしてもらおうかな」

「そんな事するわけないでしょー絶対に許さないわーバカ慎ー！」

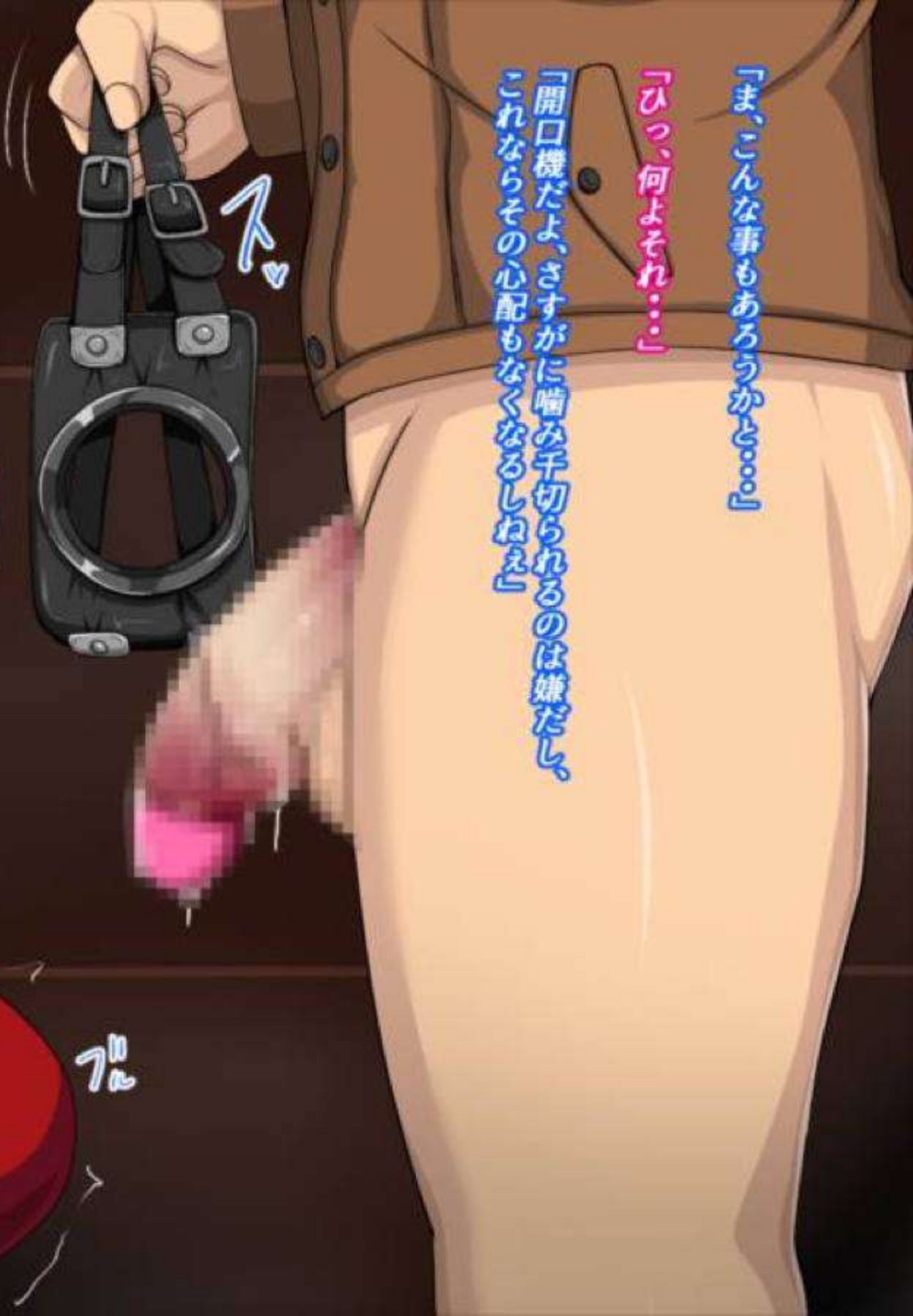
「おー怖い怖い(笑)
無理やりさせようものならチンポ食いちぎられそうだねえ」



「ま、こんな事もあるうかと…。」

「ひっ、何よそれ…。」

「開口機だよ、さすがに噛み千切られるのは嫌だし、
これならその心配もなくなるしねえ」



ズ♡

ん



ひ

ん

「う、うそでしょ…。」

「ははは、結構似合ってるよ遠坂(笑)」

「んぐううう、ふー」
(外しなさいよおおお！)

「じゃ、心配もなくなったし、失礼して」



「んむううう、んむんむん」

「んっ、おっ、げっ！」

「吐いたりなんかしないでくれよ？
綺麗にするのに逆に汚されちゃかなわないからさ(笑)」

「んっえ、ごぼっ！」

「おっと、胃液上がってきたね。
仕方ないチンポで食道を塞いで。」

ぶちゅー

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

んっ

んっ
んっ
んっ

「ぶえ、んげえ、おぼー!!!」

「くうう、残った精液出るうー!!!」

ブル

ブル

おぼ

ガ

キュ

〜

ゴ

ゴ

ゴ

「んじゅ、んぎっいー!!!」

ガ

〜

「うぶ、げぼ、げぼ」

「はーはー、ありがとうねえ遠坂あ、よだれでべとべとだけで
スツキリしたよっ♡」

「ふふふ、白目向いちやつて…これからじっくり仕込んで、
喉犯されただけでイける身体にしてあげるからさっ」

ド
ホ
ッ
ッ
ッ

がッ

びッ

ッ
ッ
ッ

お
げ
ッ
ッ

ん
ん
ッ
ッ

がッ

翌日

「今日からこの蟲蔵が遠坂の部屋だよ」

「む、蟲蔵ですって？」

「そうそう、間桐の魔術は虫を使うからね、桜もここで教育されたんだよ」





「んぐうう、ふぎいー、ふぐーいー」
「イク、いくうう、イクイク」

「おー、潮吹いてるじゃん！ハハ、すごい顔になってるよ遠坂(笑)」
「そんな我慢しなくていいんじゃないか(笑)」

やあ

やあ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

やあ

アハハ

やあ

びび



それから数日間、調教は続いていた……

「なあ遠坂く、そろそろ諦めて僕の女になりなよ、
そうしたらさすがに開放してあげるからさー」

「う、うるひやいっ！」

「呂律回ってないじゃないか(笑)まあ、

そんなに言うなら徹底的に行くしかないよね〜」





「んご、んひいいいいい!!」
（お尻もオマンコも全部入ってくるっ!）

「ほらほら、次々いくよー!」

「むぐうう、ぶぐー!」

アッ

ぐわ

ズワッ

ぐわ

ぐわ

アッ

ズワッ

ズワッ

ぐわ

ぐわ

ぐわ

ぐわ



「ハハハ、いい声で鳴くねえ遠坂、
魔術士としてだけじゃなく苗床としても一流かもね！」

「んおおおおお、ほおおお♡イクううう♡」

ヤッ、ヤッ

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

数週間後

「随分といい感じの腹になったねえ、遠坂」

「んぐ、ふーふー、ひゅっ」

ホイト

「触手突っ込まれてもわめかなくなつたのから、進歩進歩」



「はぐっ！？や、やめっ！」

「いやさ、そろそろ僕の我慢も限界なんだよね、
種付けしまくってあげるからさっさと産もうよ！」

「だ、だめえええ！」



「おおし、だいぶ育ってるね、
数日もすれば殻を破って幼虫共が出てくるよ」

「あがつ、ひいひいー♥」

「ハハハ、産むときにイッタみたいだねえ(笑)」

「衛宮だつて?…まだそんなこと言ってるの?」

「…え、衛宮く…たひゆけ…」



「まあいいや、そうか、
そんなに衛宮に会いたいなら会わせてやってもいいよ！」

「……？」

「いやさ実は行方不明ってのは嘘で、
あいつは僕が拘束してたんだよねえ！」

「どうせなら遠坂が僕のチンポでイク所をあいつに見てもらおうよ(笑)」
「ま、まってえ、お、おねがいい！」



「し、士郎！お、おねがい見ないでえー！」

おし

「ヒヒヒ、そんなに暴れるなよ遠坂♪
お前が僕チンポでアへるとこを見せつけちやおうぜ(笑)」

ひく

ビキ

「んぐー、むぐー！！」
(遠坂！遠坂あ！)

んぐ



「んぎいいひいいい！〜？お、おつぎいいい！〜」

「実は魔術で精力を強化しようとしたんだけどさ、勢い余って大きさまで凄い事になっちゃったんだよね」

「まあでも、虫や触手でしっっかり拡張してるから、ちやんと入ってるよ遠坂！」

「んぎいわれりゅうううう！〜」

ズズズ

×リリ

ブチ

どげ

どげ



「ふぐううう。んぐ、ひい♡」
（イクうう、イク♡ 士郎の前なのにい！）
こ、こんな化け物みたいなペニスにつかれてえ♡

「あー、気持ちイイ！調教のたまものだね、
ギチギチに締め上げてくるのに
膣肉がウネウネまとわりついてきて最高♡」





「くううう、出すよ遠坂あ！子宮に直接流しこんでやるからなあー！」

「んひっ♡でてりゅうううう、も、もうイクのやらあああ！」

ト

ゴ

ひっ

「ん
あ、あの遠坂がこんな……」

「ほおお♥んひい♥」

「ふー、最高に気持ちよかったよ！ハハ、突き過ぎてマンコから子宮口飛び出ちやてるよ♥」





「ふふふ、亀頭を押し付けたりしっかり吸い付いてくるね、この子宮口♥」

「あひ、りや、りやめえ♥」

ぬ
ちゅ

りや

「じゃあ行くぞ、ちやんと感じるんだぜ！」

ア

ん

ん

ん

ん

ん

「まあ僕も鬼じゃないからさ、少し位イイ思ひさせてやるよ！
遠坂、衛宮のチンポしやぶってやりなよ！」

「んぢゅ♡じゅるじゅる♡♡♡」

チンポ

「んぐむぐー」
「や、やめてくれ遠坂」

「ほら、合わせてやるからさ、一緒に遠坂に射精してやるうぜー！」

あはは

あはは

あはは



「んぐ」

「おおおおおー締まるぞ、
子宮口がキロンキロンチンポ吸い上げて♡」

ひゅん

「んぶっ♡じゅるじゅる♡♡♡
(土郎の精液いい♡♡♡)」

どか

んぐ

んぐ

んぐ

んぐ

ひゅん

んぐ

んぐ

んぐ



「ふふふ、いいや遠坂、頑張ったご褒美にこいつをやるよ！」

「ひぎいいい♡おしり裂けちゃうううう♡♡」

「身体の方はもう堕ちてるし、精神の方も時間の問題かな」

「楽しみにしてるよ遠坂！
これ以上ないってくらい優秀な肉便器に仕上げてるからな」

「くっ、だるだる！このままじゃ遠坂が…
こうなったら一か八かだ！」

あゝ♡

た。か。

は。ん。ん。



衛宮邸

「と、遠坂！？お前何してるんだ！！」

「お願い士郎、私とエッチして……」

「は、話が見えないぞ……」

「私慎二に犯されて、頭も体もおかしくされちゃった……」

「だから士郎に忘れさせて欲しいの……でないと、慎二のところに戻っちゃう」



「わ、分った、遠坂がそういうなら！」

「ありがとう士郎♡」

「好きだ遠坂！」

「私もよ士郎♡」



はっ

はっ

「あん♥はああ、ごめんね私のオマンコがばがばにされちゃって、
気持ちよくないよね……」

「そんな事あるもんか！凄く気持ちいい。
俺のに絡みついてきて、今にも意識が飛びそうだ！」

「うれしい♥出して、士郎の精液、
子宮口降りてきてるからそこに思いっきり♥♥♥♥」

ハハハ

ハハハ

ズ
チキ

ビッ

ビッ

「はぁあん♡、でてりゅよおお士郎♡♡♡♡」

「うぐっ、遠坂あぁあ！」

かっ

「お、おねがい、このまま朝まで…抜かないでして♡」

「ああ、朝までしよう、忘れさせてやるからな遠坂！」

かっ

ん

ん

ト

ッ

ビ

ッ

ッ

「士郎、大好き♡」

「はあ……姉さんったら、往生際が悪いんだから……」



「せっつかく兄さんに犯させる幻覚で虐めようと思っただのに……まさか魔力で干渉して設定を捻じ曲げてしまうなんて」

「あん、土郎のおちんちん……気持ちいい♡」

「先輩に助けてもらおう妄想……その上、おちんちんだなんてはしたないのかしら！」



「まあ、現実はこの通り、お相手は先輩どころか人間ですらないのだけど」

「んぎっ、ぶぐっ♡」

「あらっ？もうそろそろ生まれそうなのね、立派なボテ腹が変形してる♡」



「んお、おおおおお♡♡♡♡♡」

「ふふ出てきた出てきた、姉さんあなたは今先輩とエッチしてる夢を見てるかもしれないけど
化け物の子供を産んでますよ♪」

ゴブゴブ

ニクッ

グニョ



